体験して感じた家族看護

私は３年間の実習を通じ、患者とその家族を支える看護の大切さを学んできた。しかし、最近、自分自身が「患者の家族」という立場を経験したことで、改めて家族看護の重要性を実感した。
ある日、母が突然くも膜下出血で倒れ、緊急手術をすることとなった。予想もしなかった出来事に、不安や悲しさ、どうしようもない絶望感でいっぱいだった。私は看護学生として医療に関わっているのに、母の体調の変化に気づいてあげられなかったことが申し訳なく、悔しくて仕方がなかった。実習でも、患者とその家族の悲嘆的な気持ちを理解しようと努力していたが、実際は想像以上で患者の家族はこのような沢山の感情に襲われ、こんなにも辛い思いをしているのだと感じた。
　母は開頭手術を受けた為、術後は髪の毛がなくなり、意識も朦朧とした状態だった。以前と変わり果てた姿を目の当たりにし、私は何も言えず、ただ混乱し泣くことしかできなかった。そんなとき、看護師さんが私たち家族の気持ちを汲み取り、「突然のことで驚きましたね。お辛いですね」と背中をさすりながら優しく声をかけてくれた。そして、点滴やドレーンなどの医療機器について、一つひとつ丁寧に説明してくれた。その言葉に、少しだけ気持ちが落ち着いたのを覚えている。
　さらに、面会のたびに看護師さんが「今日は少し表情がよくなりましたよ」「お母さんは本当に明るい方ですね、すごいです」と声をかけてくれた。その看護師のかける言葉に、私は救われる思いがした。母の状態が良くなっていると実感できること、そして私たち家族の不安を受け止め、励ましてくれる存在がいることが、大きな支えになった。母親も「ここの看護師さんは優しくてよかった」と言っており、この看護師なら母親を安心して預けることができるとも思えるようになった。初めは意識レベルが低下しており開眼することは少なかったが、家族が来ると開眼することが増え、私が喜んでいると看護師も一緒に「すごいです」と喜んでくれた。母の回復を一緒に喜んでくれる看護師さんの姿に、私は本当に救われた。母の頑張りを認めてもらえることが嬉しかったし、それが母自身の自信にもつながるのを感じた。このとき、私は「看護師は患者の回復を支えるだけでなく、その喜びを共有する存在でもあるんだ」と改めて実感した。
　この経験を通じて、私は家族看護の重要性を身にしみて感じた。看護は患者だけでなく、その家族にも向き合うことが求められる。患者が安心して治療を受けられるように、そして家族が不安を少しでも軽くできるように寄り添うことが、私が目指す看護師の姿となった。現場に出たとき、今度は私が家族にとっての「頼れる存在」になれるよう、患者とその家族に寄り添う看護を実践していきたい。